『湖西高校物語』　第二話　「私の学校」

加藤流唯

寒さの増す一月末。私たち三年生の最後の授業日。膝掛けを掛けカイロを手にしながら、最後の授業を受ける。みんなの表情は、明るくも少し寂しげだった。

「卒業式は笑顔で会いましょう」

毎日元気な先生も今日は寂しそうだった。

私のクラスには本当にいろいろな子がいた。人と関わるのが得意な子、苦手な子。授業中に寝てしまって大声で名前を呼ばれる子。持病を持っている子もいて、いろいろな友人と関わる学校生活は、私にとってとても勉強になった。そんな三年間が楽しくてしかたがなかった。

家庭学習期間が終わり、卒業式の練習のため久しぶりに登校した日の事だ。みんな仲良く楽しそうに話していた。チャイムが鳴る。一人足りない。遅刻なんてしない子がいない。私は心配だった。

「学年集会やるから、すぐ移動してー」

先生は少し暗い声だった。

体育館に集合した私たちに、学年主任の先生が話し始めた。

「〇組の△△さんですが、持病を発症し、家庭学習期間の間に亡くなってしまいました」

言葉にならなかった。頭が真っ白になった。

教室に戻ってから先生が来るまでの間は静かだった。

「△△さんの呼名の時も、先生に呼んでもらおう」

誰かがつぶやいた。みんなもそれに賛成していた。きっとそれは私たちクラスメイトだけではなくて、学年全員が思っていたことだと思う。湖西高校には温かい人がいっぱいいるのだと感じた。

教室に戻った先生にこの提案をすると、先生は受け入れてくれた。

――卒業式当日――

教室の黒板には、華やかなイラストや先生からのメッセージが書いてあった。友達と写真を撮り合って、笑い合う。

（でも、みんなで卒業したかったな）

私の頭の片隅にはずっとあの子がいた。そしてふと、私は齋藤先生の言葉を思い出した。

「人が本当に亡くなる時は、他の人の心の中にいなくなる時だ。だからみんな、このことを忘れないでいてほしい」

悲しげな表情で私たちに伝えてくれたこと。私たちは、温かい先生方にも恵まれていた。

そして、卒業式。呼名の時間が来た。一人一人みんなの表情は違っていて、それぞれがそれぞれの三年間を振り返っている。

あっという間の三年間。その時、

「△△さん」

あの子の名前が呼ばれた。学年全員で

「はい」

とこたえる。その声は体育館に響き渡り、保護者の方も涙を流していた。私はその時、

本当に湖西高校に入学してよかったなと心から思った。

この出来事は五年経った今でも私の大切な高校生活の思い出となっている。